

いのちと地域を守る



段ボール製のジオラマ模型で震災時の津波浸水域を説明する今野理事(中央)

■ 段ボールのジオラマ模型で防災教育

楽しみながら深まる理解

復興庁が東京で開いた被災地の取り組みを紹介するイベント。会場となった千代田区外神田の体育館に右巻市中心部のジオラマが登場した。

縮尺1000分の1、2四方の土台に、等高線に沿って切り抜いた段ボールを重ねて地形の高低を再現。それぞれのパーツには、あらかじめ道路や公共施設、住宅が印刷されており、土地の利用状況も把握できる。

「この一帯は、震災で高さ8・6メートルの津波に襲われました。さて、どこまで逃げたらいかが分かりますか」。会場を訪れていた親子連れに今野英樹推進ネット理事が問い掛け、ジオラマを使っての説明が始まった。

東京の法人が受注生産



等高線に沿って切り抜かれた段ボールのパーツをジオラマ模型に組み立てる子どもたち

「(40)は「高低差が目に見えて分かるし、模型を組み立てるところから子どもが参加できるので地形をイメージしやすい」と話した。ジオラマキットは右巻市の資材会社が製作。注文の際に地域や縮尺を指定できる。これまで横浜市や宮城県女川町の小学校など全国約10カ所で防災教育などに活用されている。平均価格は10、15万円。

推進ネットの上島洋代表理事は「自分の住む街に興味を持つことが防災の第一歩。段ボールという身近な素材でジオラマを組み立てることで、楽しみながら防災感覚を育てることができると強調。自治体などにもPRしていく。」

連絡先: info@bosai-diorama.or.jp

危険箇所鳥の目線で

考える

段ボールを重ね合わせて町の地形を立体的に再現するジオラマ模型を防災教育に役立てる取り組みが始まっている。教材は、東日本大震災を機に設立された一般社団法人「防災ジオラマ推進ネット」(東京)が受注生産。災害時の危険箇所や避難経路を鳥の視点で確認でき、小さな子どもも理解しやすいと評判だ。

(報道部・高橋公彦)

伝える

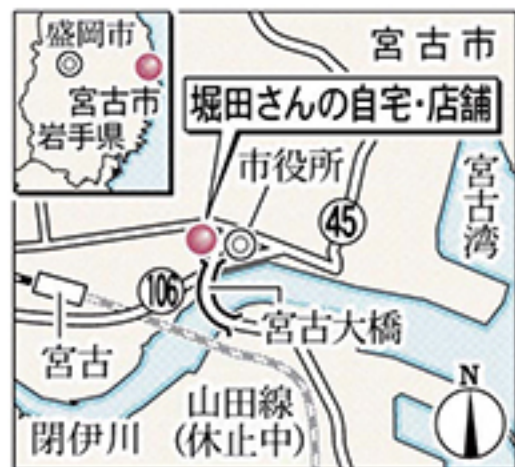
2011.3.11

宮古市新川町の飲食店経営堀田春枝さん(61)は、東日本大震災で自宅と店舗が津波に遭い、避難した屋上で命を取り留めた。復旧途上の今年8月、台風10号豪雨で再び被災。再開準備中だった店舗1階が、1・5に近く浸水する被害に見舞われた。



堀田春枝さん

■ 津波復旧途上で台風被害に (宮古市)



震災当日は、外出先から車で戻る途中で地震に遭いました。大津波が来ると思わず、帰宅後はいつものように、高齢者に配達する夕飯の仕出し弁当作りの準備を始めていました。「何やってんだ」。夫の声で玄関を見ると、ひたひたと音がして地面を這うように水が入って来ていました。何が起きたのか現実感はありませんでした。夫に引つ張られて階段を上りました。水かさは増すばかり。2階の手前までかかどめれる寸前で逃げ切

自然と共存 重い教訓



津波にのまれる宮古市街。車が折り重なるように流された。2011年3月11日(堀田さん提供)

り、屋上に着きました。街中をすいすい速く真つ黒い水が流れていました。宮古大橋から来た車がバツクしたり水に吸い込まれたり。近所の人が電柱にしがみついている。なす

すべもなく、ぼろぼろと見ているしかありませんでした。夕方6時くらいまで屋上にいたでしょうか。幸い波は引き、浸水を免れた3階の部屋に移動しました。暗くなっても「誰か助けて」という女性の声が聞こえませんでした。今も耳から離れませんでした。今も耳から離れませんでした。今も耳から離れませんでした。

約3カ月後、被害の少なかつた2階を使って弁当宅配などを再開。1階のレス

5年半で2度の被災。恐怖心やショックなど、忘れなければいけない部分があるのも事実だと思います。でも、早めの避難など教訓はしっかりと生かされなければなりません。津波への備えも重要ですが、気候が変化し、同じような台風もいつ来るかわからない。自然との共存や暮らし方など、多くのことを考えさせられます。

■ 災害がもたらすストレス 精神衛生対策普及を

探る

東北大災害科学国際研究所教授 富田 博秋さん



とみた ひろあき 岡山大学大学院医学研究科、長崎大学カリフォルニア大学バークレー校、東北大学大学院医学系研究科准教授を経て12年から現職。専門は精神医学・災害精神医学。福岡市出身。53歳。

災害は、生死に関わるつらい体験のほか、親しい人や周りの人、住み慣れた家、生活環境の喪失体験、就学・就労、生活環境などの大きな変化を多くの人々に同時に引き起こす。

これらの体験や変化がもたらすストレスは人々のこころの健康に大きな影響を

もたらすことが知られている。東北大が東日本大震災により大規模半壊以上の家屋被災に遭われた方を対象に、毎年行っている調査では、震災から5年を経ても依然、4人に1人が一定以上の心的外傷後ストレス反応の落ち込みや喜び・意欲の低下を来す抑うつ反応などが挙げられる。

「震災ストレス」(心的外傷後ストレス障害、PTSD)「うつ」という言葉は世間に浸透してきているが、それが具体的にどのような状態なのかという科学的知見に基づく災害メンタルヘルズ対策が進んでいくことが期待される。

年月の経過とともに災害が残した影響について世間の関心が薄れていく傾向があり、それだけに、震災トレスの心身への影響、自分自身からも周囲からも認識されにくくなる傾向にある。

東北大が調査の一環として取り組んでいる支援の中でも、かなり強い心的外傷後ストレス反応や抑うつ状態を呈している人が、そのことを誰にも相談せずに一人で抱えているケースが多々みられる。

東北大は健康調査などを実施しているほか、災害対応の在り方についても医学のみならず、社会科学や人文科学など幅広い研究者による学際研究を行っており、科学的知見に基づく災害メンタルヘルズ対策が進んでいくことが期待される。

現場から

地域の危険な場所を探す

本町婦人防火クラブ(宮城県村田町)会長 竹野幸子さん(74)

宮城県村田町の本町地区で、火事や自然災害に備えて活動しています。メンバーは50~80代の女性約120人。8月には水害



を想定した訓練が地域であり、おにぎりの炊き出しをしました。

災害が起きた時を想定し、地域の危険な場所を探す見回りもしています。「大きな地震が発生したら、瓦屋根が落ちて道がふさがれそうだな」などと気付くことがあります。

心配なのは、いざという時に住民がまとまって行動できるかどうかです。地域に一体感を生むためにも、普段から積極的に隣近所に声を掛けています。

噴火の被害想定を見直し

福島市民安全部危機管理室防災係長 柄窪和幸さん(47)

福島県の活火山の一つ、安達太良山の火山災害に備えるハザードマップが今年8月に完成しました。御嶽山噴火などを受け、



火山対策委員会が検討し、被害想定を過去1万年で最大だった規模に改めました。

被害が広範囲に及ぶのは冬季です。噴火の熱に伴う融雪で火山泥流が発生し、阿武隈川支流の荒川沿いでは市街地近くまで浸水する恐れがあります。

マップは市内全戸に配布し、河川の氾濫が予想される8地区と消防団を対象に説明会も実施しています。万が一の場合に避難できるように、日頃からマップを確認してほしいと思います。